



# 視点

## 日本の教育には、具体的な目標がない

●インタビュー  
**岡本 薫** 政策研究大学院大学 教授

おかもととおる ●政策研究大学院大学教授。東京大学理学部卒業後、文部省入省。OECD 研究員、文部科学省課長、内閣審議官等を経て、2006 年から現職。著書に『日本を滅ぼす教育論議』（講談社現代新書）、『クラスマネジメント入門』（日本標準）などがある。

「詰め込み教育」から「ゆとり教育」、そしてまた学力再評価へ流れる日本の教育。全国学力テストの都道府県別順位に各県は一喜一憂し、PISA 調査で右往左往する。日本の教育はいつたどこへ向かおうとしているのか？

政策研究大学院大学の岡本薫教授は、日本の教育の問題は、「子供たちをどうしたいのか、目標が設定されていないことにある」と指摘する。具体的な目標がないから、目標と結果を比較（評価）するということができない。目標がないから、評価基準や相対評価でごまかす。また、目標を達成するための手段を、目標と混同しているケースが多々あるという。

岡本教授が提唱する明快なマネジメントの手法から、日本の教育問題に切り込んでいただいた。

### 目標が曖昧な日本人のマネジメント

岡本先生は、著作の中で、「すべては目標と手段」だと書いていますね。

岡本 世の中のすべてのことは、「目標」と「手段」なんです。それ以外はありませぬ。

### 教師は生徒の目標を達成させるプロ

目標設定の大切さを、学校の進路指導に当てはめると、どうなりますか？

岡本 教師はまず、学校の目標を確認します。教師には、学校の目標という枠があるので、その枠内で行動することになります。仮に学校の目標が気に入らない場合は、学校の目標を変えさせるか、自分が辞めるしかありません。

次に学校の目標の範囲内で、自分の目標は何なのかを特定し、そして生徒や保護者の目標が何なのかを特定します。

ただ生徒が目標を特定するとき、体験と情報は提供したほうがいい。本人にとって価値があるかもしれないのに、それを知らないということがあるからです。

日本はやり直しがきかない社会で、18歳の入試の1日、あるいは22歳の就職活動で人生が決まるわけですから、サービスマネジメントや体験活動、インターンシップなど、情報を得る機会はあるだけもったほうがいいでしょう。

体験と情報を与えたら、そこ

人は自分の欲求に向かっているだけで、その欲求が、だれかの価値観から見ると正しいか、正しくないかは別問題です。

そう考えると、世の中の人は、崇高な方も、犯罪者も、自分の目標に向かっています。ただ「目標」は自分の価値観で設定して、あとはそれを達成する「手段」があるだけなんです。

では何か問題が起きたとき、「手段」と「目標」を見極めればよいといえますか？

岡本 マネジメントで、PDCA (plan-do-check-act) ということがいわれますが、日本人のマネジメントの失敗は、ほとんどプラン（P）の段階で起きています。あとのDCAで何をしようとしてもうまくいきません。

ということは、プランのなかでどかが失敗しているのがわかればよい。そこで私は、プランを5段階に分けて見る手法を提唱しています（5P手法）。

まず①現状を把握します。現状が理想状態であるかを把握すると、たいていは理想状態ではなく、問題があります。そこで②原因を特定します。それができたら、③目

標を設定します。そして④手段を選択します。もし集団なら、⑤集団意思を形成します。ここまですらプランです。

プランができたなら、⑥手段を実施します。すると結果が出て、結果と目標を比較します。これが⑦比較（評価）になります。

結果というのは、すでに現状になっていきますね。するとまた、①現状を把握します。あとは、このサイクルを繰り返していくことになります。

日本では、よく結果よりもその段階を評価するという風潮がありますが…

岡本 たとえば、総合学習についてですが、何らかの能力をつけるためにやるのなら、きっちり評価すべきです。ところが、総合学習は評価しないとされている。体験することそのものが目標だということなら、体験したかどうかを評価しないとダメなんです。

日本のマネジメントの欠陥は、つねに目標が曖昧なことなんです。⑦の評価の問題と思われるものは、ほとんど③の目標設定の問題なんです。

中央教育審議会や文部科学省で

らはどうなりますか？

岡本 そこからは価値観の問題になります。

生徒の目標と教師の目標がずれていた場合などは、学校の方針を確認しますが、各教師が自分の思想で生徒を指導しているという学校はないでしょう。

あとは、プロの教師としてのモラルの問題になり、たとえば、生徒が教師の考えとちがう目標をもっていたとしても、きっちり勉強を教えるのがプロになります。

教師というのは、生徒が何かを身につけるといって目標を達成するための手段をつくれるプロなんです。目標の内容が何であらうと、生徒の目標を達成させられるのがプロなんです。

その意味でも、学校の先生はプロである必要があるわけですね。

岡本 ただ、プロほど目標と手段を混同します。なぜかというとうと、世の中の人ややっていることはたいていは手段であって、プロになるほど目標が見えなくなって、手





段との混同に陥るからです。

ある学校の国語の先生が、コミュニケーションの授業で、二ユース番組形式で授業をしました。生徒が、アナウンサーやアシスタント、コメントーターの役になって、フリップで何かを説明するというものです。

これを研究会で発表したら、古手の先生が、「授業を冒瀆している」と言ったんです。「そのやり方では目標が達成できない」と言うならわかりませんが、「授業を冒瀆している」という言い方は、ある一定のやり方、手段に価値があると思っっているということなんです。

プロほどこのような混同に陥るんです。プロほど手段の美しさを求めがちなんです。

目標を確認して、それを達成できることが本当のプロです。そのとき、目標を達成できる手段が良い手段で、目標を達成できない手段は悪い手段ということなんです。

### 学習指導要領に達成目標がない

——さて、話をもう少し大きくして、日本の教育の問題はどこにあると考えますか？

**岡本** 日本の教育の問題は、子供をどうしたいのかという目標が設定されていないことです。

教育というのは、卒業後の子供をある状態にするためにやっているんですが、日本にはそれがありません。だから、OECDのPIISA調査で右往左往するんです。

G8（主要国首脳会議）など欧米の主要先進国は、PIISA調査でどの科目・学年も、ほとんど15位以内に入っています。

これについてイギリス政府は、「世界をリードするG8各国の子供の学力が低いなどというテストは、基準が悪いに違いない」と言っています。

フランス政府は公式に、「フランスは国民的議論を経て定めた目標に向かって着々とやっているの、この目標と関係のない基準など相手にしない」と言っています。日本もこう言うべきです。

ちなみに、第1回PIISA調査のときに、「ミシユラン東京」という本が発行されました。あのとき日本のマスコミは、ミシユランの基準に異議を唱えました。なのになぜ、PIISA調査には同じ批判をしないのでしょうか？

なりません。動機づけのノウハウや教材が必要です。ところが、これをせずに、日本も他の国も「ゆとり教育」に失敗しました。

——それは、「ゆとり教育」から脱却するにはどうしたらよいのですか？

**岡本** 他の国では、学力達成目標基準（最低達成目標）をつくっていききました。イギリスは、日本の学習指導要領をコピーしてつくりました。実は、学習指導要領のよ

うな国家基準をもっていたのは、かつては日本だけだったので、ところが他の国が、子供がどうあればよいのかという目標基準をつくっていったのに、日本にはそれがありません。いま、日本は一番遅れてしまっているのです。

国会で、「2/7+2/5がでない子供が増えている」という質問がありました。学習指導要領には何年生で教えるかが書いてありますが、子供がそれをできないといけない、とは書いていません。達成目標をつくれればいいですが、つくられていない。目標設定をきちんとしていないのが、この国の教育の問題なんです。

——具体的な目標設定はどのように



**岡本** たえば、学力テストをやった結果の学力曲線は、どの曲線が良い状態なのか、悪い状態なのかというのは、目標曲線と比較して決まるんです。しかし、目標曲線がない。だから、ちょっと思考力がある人であれば、これは何と比較しろというのだ、と気づくはずなんです。

文科科学省は、都道府県別順位を出します。順位が良い県は喜び、悪い県は大騒ぎになりますね。これは結局、具体的な目標がないので、相対評価にして目標の曖昧さをごまかしているんです。

高校の学習指導要領は、相対評価から絶対評価に変えました。評判は悪かったですが、絶対評価のほうがいいに決まっています。

平均点も使ってはいけません。クラスの平均点が上がったからといって、何の意味があるでしょうか。「木を見て森を見ず」という言葉がありますが、「森を見て木を見ず」ということになりません。クラスのトップの5人が10点あがれば平均点は上がります。でも、下位のほうは、より悪くなっているかもしれません。

それは、日本人にはレストランについて、あるべき姿の概念があるからです。でも日本の教育には、子供がどのような状態になってほしいという基準がないんです。

だから、PIISA調査の結果に右往左往するんです。

——最近悪者にされている「ゆとり教育」については、どのようにお考えですか？

**岡本** 日本は「詰め込み教育」から「ゆとり教育」にいき、学力が低下して「学力再評価」になりました。実は、これらは他の国がする問題は何ですか？

——そのほかに、日本の教育で感じられる問題は何ですか？

**岡本** ②原因の特定、ということをしらないミスも起きています。日本はPIISA調査でフィンランドの後塵を拝し、フィンランドに追いつくために、授業時数を10%増やす政策をとりました。でもこれはおかしい。なぜなら、フィンランドの授業時数は、日本より短いからです。

ある先生の分析によると、日本がフィンランドよりも下がった原因は、授業時数の不足ではないといっています。フィンランドは、できない子供が少ないのです。

だから、仮にフィンランドに追いつくことが目標であれば、時間やお金や教師といった追加的資源を、うしろ半分の生徒に投入すべきなんです。全体の授業時数を増やしても意味がありません。

——教育に関しては、日本人が総評論家する傾向がありますね。  
**岡本** 日本の教育は、思考力が足りないと言われたときがありました

でに経験していることなんです。「ゆとり教育」にあるのは、いわゆる児童中心主義(チャイルド・センタード・エデュケーション)という考えで、これは、子供たちが「自分が学びたいときに、学びたいことを、学びたいように学ぶのがいいのであって、教えてはいけない」という発想です。

これは、子供たちのほうから「教えてください」と言わなければならぬということ、成功させるには、教師はいままで千倍努力して、動機づけをしなければい

た。そのとき私は文部省にいましたが、そんなデータはどこにもありませんでした。IEA(国際教育到達度評価学会)の評価では、日本の小学校の先生の算数と理科の教え方は、思考力養成という観点から世界一とわっていたのです。ところがこれを、「ゆとり教育」で破壊してしまいました。

OECD研究員として働いていたとき、「教育と経済」というテーマで大規模な国際会議がありました。そこに招かれて講演したソニー創業者の盛田昭夫氏に対し、ある学者が、「日本人は思考力や創造力が劣っているというが」と質問したところ、盛田氏は怒って「あなたはウォークマンを知らないのか。我々が思考力や創造力がなくウォークマンを開発したというのか。そんなことを言うのなら、証拠を出せ」と言って黙らせました。

目標をもっていない日本の教育は、いまのいい因果関係まで破壊してしまうことがあります。ですから少なくとも、何か問題が持ち上がったとき、②原因をしななければいけないでしょう。